

朝来郡朝来町

# 木之内城跡

—播但連絡道路(5期事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

2001年3月

兵庫県教育委員会

朝来郡朝来町

# 木之内城跡

—播但連絡道路(5期事業)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I—



2001年3月

兵庫県教育委員会

# 例　　言

1. 本書は、兵庫県朝来郡朝来町物部字木之内142他に所在する『木之内城跡』の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は播但連絡道路（5期）事業に伴うもので、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 発掘調査は確認調査を平成8・9年度、本発掘調査（当時、全面調査）を平成9年度に実施した。  
それぞれの調査番号・担当者は下記のとおりである。

確 認 調 査	（平成8年度）	960256	山上雅弘
確 認 調 査	（平成9年度）	970416	山上雅弘・三枝 修
本発掘調査	（平成9年度）	970417	山上雅弘・三枝 修・小川弦太
4. 整理作業は平成12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
5. 本文の執筆は山上・小川が本文目次のとおり分担して行い、編集は整理担当嘱託員 栗山美奈の協力をえて、山上が担当した。
6. 本文に使用した標高は東京湾海水準（T. P.）を使用した。
7. 本書に使用した図版のうち、遺跡分布図には国土地理院発行2万5千分の1地形図「但馬竹田・但馬新井」図幅を使用した。遺構については、現地で各調査員・調査補助員が実測した図面を元に作成した。遺物については、整理技術嘱託員が実測した図面を元に作成した。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々に助言・助力を得た。記して感謝の意を表したいと思います。（敬称略）  
木戸雅寿・高橋成計・谷本 進・田畠 基・福島克彦・西尾孝昌・中島雄二・中西裕樹

# 本文目次

## 目 次

### 例 言

第1章 調査に至る経緯.....	(小川) 1
第1節 調査に至る経緯.....	(小川) 1
第2節 調査体制.....	(小川) 2
第2章 周辺の遺跡.....	(小川) 3
第1節 地理的環境.....	(小川) 3
第2節 歴史的環境.....	(小川) 3
第3章 調査の成果.....	7
第1節 はじめに.....	(山上) 7
第2節 西 郭.....	(山上) 8
第3節 西郭の造成.....	(山上) 10
第4節 出土遺物.....	(小川) 11
第4章 ま と め.....	(山上) 12

## 挿図目次

第1図 朝来町の位置

第2図 周辺の遺跡

第3図 城跡周辺の地形

第4図 調査前の地形図

第5図 出土遺物

## 図版目次

図版1 木之内城跡全体図

図版2 調査区全体図（西郭）

図版3 西郭1平面図

図版4 西郭断面図1

図版5 西郭断面図2

図版6 堀切1平面図

図版7 堀切1断面図

図版8 段状遺構平・断面図

図版9 西郭造成図

図版10 主郭主要部平面図

図版11 主郭北部平面図・経塚

## 写真図版目次

図版1 北西上空から望む城跡

（手前山麓が物部城）

北東上空から望む城跡

（手前山麓が物部集落）

図版2 遠景（南東上空から）

遠景（東上空から）

主郭を東山麓から望む

図版3 遠景（西上空から）

青倉谷を城跡方向から望む

物部城（木之内城西郭から）

図版4 調査前の西郭（南から）

調査前の西郭（西から）

図版5 調査後全景（南から）

調査後全景（西から）

図版6 調査前の西郭全景（北西尾根から）

調査前の西郭中心部（西から）

調査前の堀切1（北から）

図版7 調査後の西郭全景（北西尾根から）

調査後の西郭中心部（西から）

調査後の堀切1（北から）

図版8 西郭断面（東から）

通路・腰曲輪2断面（東から）

腰曲輪1断面（西から）

図版9 西郭完掘状況（東から）

通路・腰曲輪2完掘状況（東から）

腰曲輪1完掘状況（西から）

図版10 ①段状遺構全景（東から）

②段状遺構1（東から）

③段状遺構2（北東から）

④段状遺構3（南西から）

図版11 ①堀切1完掘状況（南から）

②堀切1（北東から）

③堀切1断面1（南から）

④堀切1断面2（南から）

⑤堀切1断面3（南から）

図版12 ①西郭断面1割り状況（西から）

②堀切4断面2の西郭側盛土状況

（南から）

③断面2割り状況（南から）

④堀切4断面3の域外側盛土状況

（南から）

図版13 主郭中央部（経塚付近）周辺（西から）

主郭堀切2（北から）

出土遺物

図版14 西郭2の盛土

物部城跡（木之内城跡から望む）

作業風景

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 調査に至る経緯

一極集中型社会から地方分散型社会への転換が21世紀の課題としてあげられるなか、兵庫県もその取り組みを始めている。瀬戸内海から日本海まで、本州を南北に貫く兵庫県は地理的条件を生かし近畿・中国・四国地方との交流を容易にする多角的ネットワークの形成を目指している。それは、これまで阪神間に集中していた社会資本の蓄積を、県内の拠点と成りうる各地域に均衡的に広げ、それぞれの地域に即した発展を促そうとするものである。

こうした発展の基盤となるのが県内の高速道路網の整備である。全国8位の県土をもつ兵庫県は旧国名で、摂津・播磨・丹波・但馬・淡路の5国を含み、各地域それぞれの自然環境や文化を育んできた。しかしこのことは、県内各地が地理的に分断されていることを表しており、人や物資の交流にとって大きな障害となることを示している。このような地理的の条件に打ち勝つため、山や海で遮られている県内の各地域を1時間で結ぼうとする「県内1時間高速道路網」の確立が目指されることになった。

これまで兵庫県は、中国自動車道・山陽自動車道・近畿自動車道・舞鶴自動車道・淡路鳴門自動車道など高速道路網の整備を進めてきた。しかし、整備が進められてきたのは瀬戸内海側に偏っており、但馬地域は高速道路の空白地域となって取り残されてきた。唯一、播但連絡道路が姫路JCTから生野北間まで供用されているのみであった。

この空白地域を埋めるため、播但連絡道路の北伸事業が計画された。この計画は、姫路JCTから生野北間の供用区間を和田山町まで伸ばし、北近畿豊岡自動車道と結ぼうとするものである。将来豊岡まで高速道路が整備されると但馬地域は播但連絡自動車道を介し、中国自動車道・山陽自動車道・姫路バイパスと結ばれることになる。これによって、県内の高速道路空白地帯が解消され、兵庫県が進める高速道六基幹軸整備のひとつ、播磨但馬軸の整備が図られることになる。

しかし、現代の交通路は古代でも重要な交通路であった。そのため、計画路線内には多くの遺跡が存在していた。円山川沿いの地域には古墳が多く分布しており、山裾を進む高速道路建設によって破壊される可能性があった。また路線沿いには国史跡竹田城跡があり、中世以降の山城も多く分布していた。こうして、工事の実施に先駆けて兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所より埋蔵文化財の分布調査の依頼を受け、兵庫県教育委員会は平成6・7年度に分布調査を実施した。さらに平成8・9年度に確認調査を行った結果、事業予定地内No13地点に山城（木之内城）の存在が確認された。山頂をカットする工事によって遺跡が消滅するため、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所の依頼を受け、遺跡名を所在地の字名をとり「木之内城跡」と呼称し全面調査を実施した。

発掘調査が終了して2年2ヶ月後、平成12年5月に播但連絡自動車道は、生野町～和田山町間（約17km）の供用が開始された。工事の着工から30年の年月を経てようやく姫路～和田山までの全線（約65km）が開通したことになる。

## 第2節 調査体制

### 【発掘調査体制】

#### 1. 平成8年度確認調査の概要

平成6・7年度に行った分布調査の結果No13地点において、郭と堀切が確認されたため山城の存在が想定された。対象地域はすでに工事の着工が決定していたため、兵庫県道路公社の依頼により平成8年8月に確認調査を実施した。調査の結果、尾根頂上部周辺に山城造成時の盛り土や平坦地が確認され、西側には堀切が設置されていることが判明した。頂上部付近のトレンチから古墳時代の須恵器が出土したため、山城造成以前、頂上部が古墳として利用されていた可能性が新たに想定された。

平成8年度 確認調査（960256） 平成8年8月20日・28日

調査担当職員 全面調整班 山上 雅弘

#### 2. 平成9年度確認調査の概要

遺跡の詳細をより明らかと/orするため、平成9年12月に第2次の確認調査を実施した。調査は、山城南側の範囲を確定するためのトレンチと、頂上部周辺に古墳の有無を確認するためのトレンチを設定した。調査の結果、山頂郭や郭斜面など山城造成時の痕跡が見つかった。しかし、古墳の周濠や主体部は確認されず、その存在は否定されることになった。

平成9年度 確認調査（970416） 平成9年12月8日～9日

調査担当職員 調査第2班 山上 雅弘・三枝 修

#### 3. 平成3年度 全面調査の概要

確認調査の結果、木之内遺跡は山城の一部であることが明らかとなり、兵庫県道路公社の依頼により平成10年1月～3月に全面調査を実施した。調査はすべて人力掘削によって行い、適宜写真撮影や図面作製を行った。同時に調査区外へと伸びる山城の平面図を平板測量によって作製した。調査区内については、航空測量を実施し、1/100・1/50の平面図を作成し、遺跡の空中写真撮影も同時に行った。

平成9年度 全面調査（970417） 平成10年1月21日～3月24日

調査担当職員 調査第2班 山上 雅弘・三枝 修・小川 弦太

### 【整理作業体制】

整理作業は平成12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

整理担当職員 整理普及班 岡田 章一

調査第1班 小川 弦太

調査第3班 山上 雅弘

整理担当嘱託員 栗山 美奈・加藤 裕美

## 第2章 周辺の遺跡

### 第1節 地理的環境

木之内城跡が所在する朝来町は、南北13km・東西18.2km・面積130.2km<sup>2</sup>であり、そのほとんどが山地で占められている。町の中央部には、生野峠を分水嶺とする円山川が南北に流れおり、神子畑川、多々良木川、伊由谷川が支流として流れ込んでいる。これらの河川によってつくられた平野部には農耕地が広がり、その周囲に集落が点在している。

円山川と伊由川が合流する地点が町内で最も広い平野部であり、木之内城跡はその平野を見下ろす丘陵頂上部にある。城跡から北にある竹田城を望むことは出来ないが、南への見通しはよく、生野町へと続く谷平野を見渡すことが出来る。

現在県道104号線が通っている道は、古くから生野峠をへて播磨と但馬を結ぶ交通の要所となっている。そのため遺跡周辺には竹田・新井・山口など街道沿いに発達してきた町が存在している。

朝来町と接する生野町は現在では但馬地方であるが、「播磨風土記」によると播磨地方に属している。このことから、朝来町は但馬の玄関口に位置してきたといえる。



第1図 朝来町の位置

### 第2節 歴史的環境

木之内城跡がある朝来郡部地区周辺は朝来町内でも遺跡の多いところである。そのほとんどは、古墳時代の遺跡であるが、国史跡竹田城跡が近くに存在するため、山城など中世の遺跡も比較的多く確認されている。ここでは、木之内城跡周辺の主要な遺跡について、朝来町内を中心として時代をおって概観する。

旧石器時代の遺跡は、朝来町内や、同じ円山川流域の和田山町内においても発見されていない。縄文時代の遺跡も朝来町内ではみつかっておらず、郡内には和田山町筒江の片引遺跡において晩期の遺物が出土しているのみである。

弥生時代の遺跡は、木之内城跡周辺ではムクノ木遺跡が代表的である。この遺跡では、弥生から中世にいたるまでの遺物が出土している。朝来町内においては、石錐や土器片が採集されているのみで、弥生時代の遺跡は確認されていない。

木之内城跡がある朝来町北部には多くの古墳が存在している。そのほとんどが横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳である。その中で、前期古墳と考えられているのが八王子古墳とミゾ谷古墳である。伊由市場にある八王子古墳の主体部は竪穴式石室と考えられているが詳しいことはわかっていない。ミゾ

谷古墳は、木之内城跡と同じ物部地区にある古墳であるが、現在は破壊されている。古墳周辺から出土したと伝えられる古式土師器によって4世紀後半の時期があてられている。

中期の古墳では、朝来町桑市地区にある船宮古墳が代表的である。朝来町内で唯一の前方後円墳であり、その規模は但馬地方第2位の大きさを誇っている。全長約80m、前方部をやや北東に向かって、周濠、葺石をもつ。周濠は後円部とその西側に痕跡をとどめているが、東側は、県道によって破壊されている。古墳周辺からは円筒埴輪・壺形埴輪片も採集されている。古墳の埋葬施設は明らかではないが、後円部墳頂北側に石室の一部と思われる石が露出しており、横穴式石室の天井石ではないかと推測されている。そのほかに中期古墳として、伊由市場の南山古墳群が知られるが実体については不明なところが多い。

後期古墳は、朝来町内を流れる円山川やその支流が作り出した谷部に多く存在し、いずれも群集墳である。代表的な古墳群は、物部地区的カクシ谷古墳群・山内地区の山内古墳群・多々良木地区の和谷古墳群などがある。そのほかに生産遺跡として松谷窯跡があり、古墳時代後期の須恵器窯と考えられている。

歴史時代以降の遺跡では、近年の発掘調査によって奈良～平安時代の遺跡が知られるようになった。そのなかで、立脇地区で発掘調査が行われた立脇寺は、古代の瓦が出土したこと有名である。出土した瓦の文様から7世紀末から8世紀初頭の年代があたえられており、その文様構成から播磨地域との関連が言われている。その他では、斎串と思われる木製品が出土した釣坂遺跡、平安時代の土師器焼成遺構が確認されたビシャモン谷遺跡などがあげられる。

中世に入ると、但馬山名氏と播磨赤松氏が長年にわたり宿敵関係を続けた。朝来町はまさに但馬と播磨の国境地点にあたるため、戦略上多くの山城が築かれた。木之内城跡周辺の山城で最も有名なのが和田山町にある竹田城である。竹田城は、山名氏の有力家臣太田恒氏の居城と伝えられ、昭和18年に史跡に指定されている。朝来町内には、竹田城に隣接する山城として、物部城・山内城・岩洲城などが存在している。これらの城は、天正5年と天正8年に羽柴秀長が竹田城を攻めたときに、運命をともにしたものと考えられている。

### 主要参考文献

兵庫県教育委員会 1982 『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』

権本誠一・瀬戸戸野晴 1982 『日本の古代遺跡2 兵庫北部』

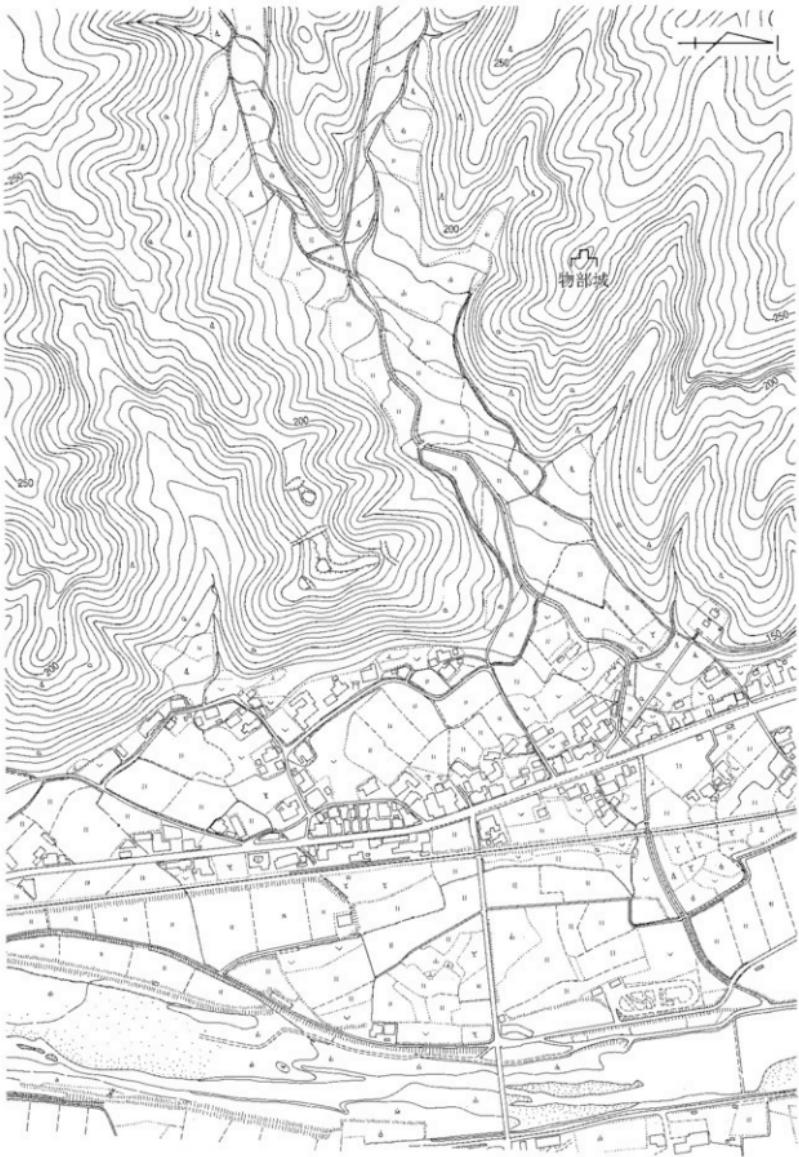
朝来町教育委員会 1990 『船宮古墳』

和田山町教育委員会 1994 『但馬・和田山 史跡竹田城跡』

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	竹田城下町遺跡	中世	10	木之内城跡	中世	19	松谷窯跡	古墳	28	松尾谷古墳群	古墳
2	竹田城跡	中世	11	本谷古墳群	古墳	20	釣坂遺跡	奈良～平安	29	和谷古墳群	古墳
3	ムクノ木城跡	中世	12	ミゾ谷古墳群	古墳	21	トウスガ谷古墳群	古墳	30	山本城跡	中世
4	ムクノ木遺跡	弥生～中世	13	山内古墳群	古墳	22	福本遺跡	奈良～平安	31	白鹿古墳群	古墳
5	ガンド寺跡	中世	14	正蓮寺跡	中世	23	立脇麻寺	奈良	32	広田遺跡	中世
6	カクシ谷古墳群	古墳	15	山内城跡	中世	24	立脇城跡	中世	33	谷の上経塚	中世
7	ビシャモン谷遺跡	奈良	16	南山古墳群	古墳	25	コモ井遺跡	中世	34	岩洲城跡	中世
8	物部城跡	中世	17	八王子古墳群	古墳	26	多々良木古墳群	古墳	35	法野遺跡	中世
9	宮谷古墳群	古墳	18	船宮古墳	古墳	27	堺原古墳群	古墳	36	薦部前遺跡	奈良～中世



第2図 周辺の遺跡



第3図 城跡周辺の地形

## 第3章 調査の成果

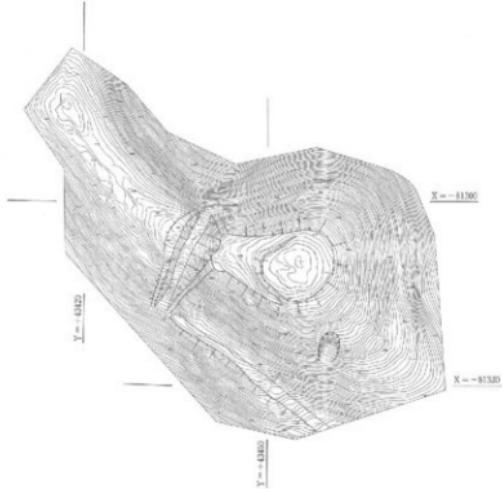
### 第1節 はじめに

木之内城跡は円山川西岸の山稜から派生した尾根末端に立地する中世山城である。麓の物部集落は生野と和田山をつなぐ往還の街道筋に面した集落で、街道（旧道）に沿って家並みを連ねる。山城は立地からすると、この集落に密接に関わると考えられる。

遺構は集落側に面した東側の頂部に位置する主郭と、西側の一段高い西郭で構成される。今回の調査はこのうちの西郭部分を実施した。主郭の立地する頂部は通称「薬師山」と呼ばれる。標高213m、麓からの比高は130mを測り、L字状に広がった西端が西曲輪に続く尾根筋となる。三方を堀切2~4で遮断するが削平は甘い。西郭は標高222.21mを測り、主郭より10m前後高くなる。周囲の斜面は急傾斜で、尾根上は総じて痩せ尾根である。

調査前の山城は尾根筋を分断する堀切が確認できたが、他の部分には明確な造成が認められず、一見すると自然地形のように観察された。あえて、図化すれば第4図のような遺構概念図を描けるが、堀切以外は明確に遺構と判断できる状況ではなかった。

この他、当城は分布調査によって発見されたが、文献や伝承からは存在を知る手掛かりは見いだせない。隣接の物部城は存在が知られていたが、当城については省みられることがなかったようである。また、調査前の地形では西郭の南斜面に里道状の地形が観察されたが、調査によって表層の土砂移動だけで道路幅を確保していることが判明した。このことから、この里道は近世以降のものであることが確認された。



第4図 調査前の地形図

## 第2節 西 郭

西郭は標高222m、南北20m、東西40m、面積800m<sup>2</sup>の規模を持ち、西郭1・2、腰曲輪・通路1・2、堀切1、段状遺構1～3で構成される。

### 西郭1

やや梢円形ぎみの平面を呈する郭で、南北8m、東西15mの規模を測る。南側には通路1・2が、北側には腰曲輪が郭縁辺に沿って構築される。内部は縁部へ向かって斜面側へ傾斜しており、東端では特に大きく傾斜しながら明瞭な縁部がなく、斜面にいたっている。通路1との段差は1.25m、腰曲輪との段差は1.6m、西郭2とは間に通路をはさんで0.5mの段差をそれぞれ測る。

内部の大半は自然地形を残すが縁部と、その他の一部に若干の加工を施す。縁部以外で加工を施すのは中央の壇状遺構と、通路1の入口付近の平坦地形である。壇状地形は四隅をわずかに削りだすことでの構築され、周囲に対して20cmほど高くなっている。一方、平坦地形は東・北面を削り出し、内部を平坦に加工するもので、通路1を通じての主郭からの入口を受けるための施設痕跡と判断される。両者とも平面は方形に近い形状で、面積10～12m<sup>2</sup>前後である。形状・規模からすると前者は建物基礎の可能性がある。

西郭1の造成は通路・腰曲輪・西郭2の郭堀と斜面（切岸）を削り出すことのみで形成しており、盛土による造成は全く行わない。また、東・北側には自然地形の傾斜をそのまま残している。但し、この部分については現状が急傾斜であるため、加工を省いたとも考えられるが、北辺では腰曲輪が幅を減じながらおわるため、崩落によって盛土部分が流失したとも考えられる。

内部の生活痕跡は平坦地に散見された炭・焼土のみで、関連する遺物は全く出土していない。

### 西郭2

郭内部は標高218m前後で、東から西へ傾斜し、西端に幅1.5m、高さ20cm前後の土堤を持つ。南辺では通路2、北辺では腰曲輪へと小段を経て続いている。造成は東側の西郭1との境のみ削り込みを行うが、残りの部分は切岸部も含めてすべて盛土によって形成され、この郭が西郭のなかで最も大きな造成をおこなう。この盛土の供給先は堀切1にもとめられるが、詳細は造成の項目で再度触れたい。内部は堀切1側に向かって傾斜するが、郭南辺では縁部付近が斜面側に大きく傾く。この部分は盛土がやや軟弱であるため崩落が著しかったためであろう。

### 腰曲輪

西郭1に沿って設けられるが、幅1～1.5m、長さ11mにわたって検出できた。ただし、東側は崩落のために詳細は不明である。前述のとおり西郭1との段差は堀を削りだしして、斜面側に盛土することによって形成している。

### 通路1・2

通路1・2は西郭1の南辺に沿って設置される。通路1が幅1.5m、長さ11m。通路2が幅1m、長さ13mの規模をそれぞれ測る。前述したとおり、通路1が西端で西郭1に接続し、通路2が東の主郭か

ら続く尾根から南側を通り、西郭2に進入する。通路1と通路2は東側で合流するが、この部分は主郭から西郭に上る尾根筋にある。このため通路は主郭から西郭に進入する通路の末端と考えられる。但し、人工的な加工を観察できたのはこの部分のみで斜面側に通路痕跡を認めることはできなかった。また、尾根筋の途中には段状遺構1～3がある。この段状遺構1・2の間と通路1・2、主郭を結ぶ線は尾根の背にあたり直線的な地形が観察される。このことから、通路は尾根の背を通り主郭と通路1・2に繋がっていたと考えられる。

### 堀切1

堀切の規模は最大幅5.5m、長さ17mを測る。尾根上から南斜面の中腹まで掘削が及ぶが、北斜面については尾根上から7m以下は崩落しており詳細は不明である。

深さは尾根部で城外側に約1m、西郭2とは1.7mの高低差を測る。斜面部では南側で城外側と1.0～1.2m、城内側で1.0～1.2mを測る。北側では城外側と1.0m前後、城内側で0.8mを測る。

堀切は城内側（西郭2側）・城外側の両側面に土壘をもつが、この土壘が斜面まで連続し、堀切を覆うように構築される。土壘の幅は城外側で1.5～2.5m前後、高さは40cm～50cm前後、城内側で1.5～2.0m前後、高さは40cm～50cm前後（西郭部を除く）と小規模だが、堀切底との高低差を増すために設けたものと考えれば、両者の高低差は十分に効果を発揮すると考えられる。

堀切の平面形状は尾根部でやや幅広くなるが斜面部は形状が一定している。但し、斜面の末端はややすばり気味におわっている。また、この周囲は地山土の掘削が浅く、むしろ両側に土砂をおいて土壘を構築することによって、高低差を出している。

堀切の両斜面の底部には幅2.0～2.5mの堅堀状の掘削痕跡が観察された。これは、尾根部の両端にあたる肩部から堀切末端まで続くもので、堀底から城内外側の斜面立ち上がり部の10～15cm前後の範囲にかけて存在する。斜面立ち上がり部は垂直、堀底は水平になるので断面は箱型を呈する。これは尾根の背を掘った後、斜面側に作業を移す段階での工程差と推測される。また、この堅堀状の痕跡は地山の表土部分ではなく、岩盤質の部分を掘削する部分にのみ観察された。このため、堀切斜面の掘削は表土と軟質な土砂部分をまず掘削した上で、こののちに岩盤質の部分を堅堀状に掘削したと推測される。

なお、堀切の底及び内側斜面部は廃城直後に土砂によって埋もれたと思われ、崩れや、降雨などに伴う自然流水の痕跡は認められなかった。このため、掘削時の状況をそのまま残していると考えてよい。

また、斜面を堅堀状に掘削したことによって生じた、礫混り土は西郭2の下層に盛土され、郭盛土の土留めとして利用された。

### 段状遺構

西郭の東斜面の中程に段造成の痕跡を確認した。中央を段状遺構1、北側を段状遺構2、南側を段状遺構3とした。いずれも東側斜面を削り、西側に若干の盛土をするが、段状遺構2は盛土部分が流失し、削平部分のみが残される。段状遺構1が南北5m、東西3.5m、段状遺構2が南北4m、東西2.5m、段状遺構3が南北2.5m、東西2.5mを測る。いずれも小規模で方形を意識した形状である。これらは小屋などの基礎部分と考えられるが、生活痕跡が認められないため、短期間の使用に止まった遺構と推測される。

### 第3節 西郭の造成

#### 築城過程

西郭の築城は大きくみると、①西郭1の周囲を削ることで郭の切岸を立て、腰曲輪・通路の造成を行う。②堀切1を掘削し、両側に土砂を盛る。さらに、③堀切1によって生じた土砂を西郭2に盛土する。以上の3つに普請部分の工事が分けられる。

この他、④西郭2の濠上造構・平坦地形と⑤東斜面の段上造構1・2・3などの個々の施設を造りだす作事部分の工事がある。

①の造成は、西郭1縁部に盛土がなく、郭1裾部の削りと腰曲輪・通路の縁部周囲の盛土のみが行われていた。この事実から、内部を造成する意識よりは、周囲の郭の面を確保し、切岸を立てることに築城の主体があると評価される。しかし、いずれにしても造成の範囲は小規模で郭を積極的に加工する意欲には欠けている。

土の観察からすると、土砂の移動は西郭1の裾部の削半土をそのまま腰曲輪・通路の縁部の盛土に使っており、もっとも直近の土砂の移動のみに止まっている。

②については、尾根線を遮断する掘削がまず行われ、次に斜面を掘削したと推測される。また、堅堀状の掘削痕跡の存在から、斜面部下層の掘削は上から斜面掘に向かっておこなうが、この作業によって岩盤質の礫層を掘削し、多量の礫を生じさせている。これらから排出した土砂のうち斜面部表層のもののみが両サイドの土壘へ盛土している。

③については、まず堀切1の地山掘削によって生じた、尾根筋と斜面部の礫混じり土は西郭2の下層に盛られた。これは造成の基盤層となり、縁部や斜面裾部の土留めとして利用されるためである。そしてこれらは急斜面の上に盛土するための足場層の役目を果たしたと考えられる。また、堀切表層の土砂は斜面部の大半が両側の土壘状地形に盛られたが、その他の残りはすべて西郭2の上層盛土に利用された。このような関係から考えると、西郭2の西端から両サイドに下る土壘は郭造成が1区切りしないと完成できることになる。このため、堀切1と西郭2は同時に築城作業がなされたと考えられる。(但し、斜面部の土壘については堀切掘削と同時に表土を横置きするのが合理的である。このため土壘の構築は西郭2の作業の区切りを待たずに行われたと考えられるが、仕上げに関しては西郭2の郭壁が形成されないと完了できなかつたと思われる。)

#### 造成土量

調査対象となった、西郭の土量について考えたい。まず、西郭の土量計算であるが、次の土量の合計で計算できると考えた。①西郭2の盛土、②堀切1の上層盛土（西郭2内は除く）③西郭1の盛土、④腰曲輪の盛土、⑤通路1の盛土、⑥通路2の盛土、⑦段状造構の盛土。以上である。これらの盛土量を各土層断面を利用して計算すると、以下のようになる。① $15.69\text{m}^3$ 、② $10.88\text{m}^3$ （西郭2内は除く）、③ $1.0\text{m}^3$ 、④ $9.0\text{m}^3$ 、⑤ $0.4\text{m}^3$ 、⑥ $2.1\text{m}^3$ 、⑦ $4.9\text{m}^3$ 、これらの内、普請部分に相当する①～⑥を合計すると $39.07\text{m}^3$ 、全体を合計すると $43.97\text{m}^3$ となる。西郭の造成影響範囲は $567.0\text{m}^2$ であるから単位面積当たりの土量は約 $0.07\text{m}^3$ となる。この合計値は、内場山城跡を下回っている。同城跡も曲輪造成にあまり労力を割かず、その一方で周囲の帯曲輪が発達する遺構であることが知られ、当城と共にした特徴を有しているといえる。このことからすると、主郭の土量が明確でないため結論はできないが、土量計算からも軽微な

造成に止まつた遺構であることが検証できた。

#### 旧地形と造成

西郭1は尾根の頂きにあるが周囲は幅8m前後で、おおむね東西方向に軸線をもつ尾根上にある。この尾根の東側は頂部から、南に屈曲して主郭方向に下る。反対に西側には堀切1周囲で、一度尾根筋が北に屈曲し、堀切城内側の崩落部から急激に傾斜地形となる。堀切は西郭2の傾斜地形を利用して造りしており、城外側の土壠裾部までが堀切の範囲となっている。ここから西側には尾根筋は平坦である。

尾根幅は頂部（西郭1）のあたりが最も広く、西郭2のあたりで4~5m前後と急激に幅を減じる。また、東側は幅1~2m前後の尾根幅であるが傾斜があり、平坦地は造成しないと確保できない。

堀切・西郭2周囲は西郭2の西端で瘤状の小規模なビーグがあり、この周囲を境に尾根筋の軸線が少し屈曲している。そして堀切はこの小ビーグの西側と、このビーグが下った鞍部の手前を区切るように掘削している。また、堀切の斜面についても尾根頂部に並行して屈曲する。南側は堀切城外側の土壠周囲で元々少し尾根状の張出をもつが、これを起点にやや屈曲が認められる。この部分から城内側はやや谷状となり堀を掘削して遮断のための防護施設を設けるには最適の場所となっている。

北側についても屈曲部でやや谷状地形が認められ堀切が遮断線として大きな効果が得られる地形である。また、堀切の設定が尾根の小ビーグから尾根鞍部の手前で止まるこも注目される。

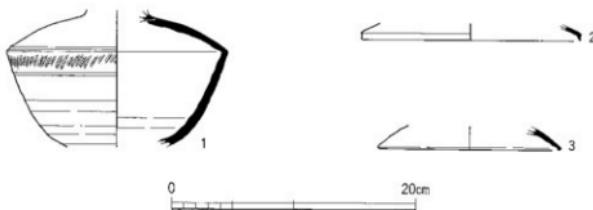
### 第4節 出土遺物

遺物はわずかであった。いずれも破片であり、かろうじて壺のみが接合できた。また、土器以外の遺物は出土していない。しかし、これらの土器は山城よりは古いもので、いずれも直接は関係しないものである。

壺（1）長頸壺の体部である。調査区の斜面から破片の状態で出土した。肩部に凹線を2本巡らし、その間に列点文を施している。体部は、内外面ともに回転ナデ、底部の外面は回転ヘラケズリを行っている。

蓋（2・3）破片が2点出土している。いずれもわずかな破片での出土であり、反転復元で固化をおこなった。2は、口縁端部がやや外反して垂下する。小さな破片である。

3は、外面に赤褐色の自然釉がかかる。1は6~7世紀前後、2・3は9世紀前後の遺物と考えられ、いずれも山城の時期よりは古い遺物である。



第5図 出土遺物

## 第4章 まとめ

今回、木之内城跡の調査は西郭のみに止まったが、残りの主郭については地形測量を実施した。このため本項では、まず主郭について地形測量図をもとに検討を加えたのち、木之内城の評価について若干触れ、まとめとしたい。

### 1. 主郭と経塙

主郭は標高213m、面積2,000m<sup>2</sup>ほどの規模で、物部の集落に面し、比高差80mの山裾を眺む。形状は東側で南北に折れ、L字形を呈している。郭のレベルは西郭から続く東西方向の尾根筋が高く、幅も比較的広い。そしてL字形の交点部分が郭の最高所で、この周囲は平坦面がもっとも広くとれる地形である。これに対して集落に並行する南北辺は北に下る地形で、北端では標高200m前後となり、交点部分とは10m前後の標高差を測る。

主郭内部の削平は甘く、地表面観察では自然地形としか判断できない。しかし、図示したとおり、尾根上の縁部には小規模であるが部分的に通路状の段や、斜面部に帶郭状の地形が認められた。これらの地形の中には、後世人為的に加工されたものや、単なる自然地形の起伏も含まれていると思われるが今回すべてを区別せずに図化している。ただし、これらの中、堀切4の城内側斜面に認められる平坦地は、堀切との関連で設けられた遺構である可能性が大きい。また、この平坦地の西側には堀切との間に土壘状の地形が認められる。また、L字の交点部分から南に一段降りて張り出した一角は、小規模であるが堀切3に向かって突出するもので、西郭2と同じく堀切に向けて造成された郭と思われる。

主郭の尾根続きには堀切2～4が設けられ、城域を画し、城内外を分断している。堀切2は西郭と主郭の尾根筋に設置され、末端は斜面に長く伸びており、堀切1同様斜面の通行遮断を強く意識している。

堀切3は主郭の南東側の尾根続きを分断するもので、幅5m前後を測る。堀切4は主郭の北尾根続きを分断するもので、やはり末端が斜面下方まで長く伸びて、斜面を意識している。堀切3・4とも城外側に小丘状の地形を有し、堀の城外側からの高低差を大きく見せる工夫をしている。

この他、主郭のL字の交点部分には、礫が散布する小丘状のマウンドが認められる。この小丘の規模は直径10m、高さ0.8m前後を測るが、周囲の状況から考えて、経塙に類する遺構の可能性があると判断される。一方、この小丘の東側には長さ4m、幅1m、深さ0.7mの掘削坑が観察されるが、明らかに人為的な掘削坑で、礫が散布する小丘を狙って掘削したものと推定される。物部地区には、近年この山から壺を掘り出したことを記憶する人が数名おり、数年後に壺は業者に売却したという。このことからすると、掘削坑はこの時の盗掘坑と考えられ、壺の出土場所が、小丘の周囲であった可能性は非常に大きい。この他、集落の真裏に位置する立地や、この山が栗原山と呼ばれていることも経塙であることを裏付ける材料として注目される。

### 2. 木之内城跡の評価

当城は2郭（主郭・西郭）とこれを要所で区切る4本の堀切によって構成される。郭内は既述のように現状地形では造成痕跡を観察できない。発掘調査が行われた、西郭でも造成は行うが全体的には切岸・郭面積の確保には積極的ではなく、防御施設である堀切構築に力点が置かれていた。

当城の郭内には腰曲輪や通路、堀切防御のための小曲輪はあるが、軒心の中心部分はほとんど加工がなされない構造であった。但し、西郭内には、虎口に関連する段状地形や簡易な削り残しの塙状遺構、平坦地形が認められ多少の造成をおこなったことは注意される。

このような郭未発達の城郭は近年各地で事例が増えつつある。山神城（三重県渡会郡玉城町）、四五追城（広島県芦品郡新市町）、火山城（兵庫県水上郡春日町）などがそれである。これらの城ではいずれも、中心部分、特に尾根頂上部の主郭が立地する場所での郭形成が未発達である。また、防御施設も堀切や切岸など簡易で小規模なものが散在して設けられる程度に止まる傾向がある。その一方で、尾根筋の先端や、斜面中腹に簡易で小規模な段状遺構が認められるものが多い。この部分には生活痕跡が認められることが多く、山神城では遺物の出土が、ここのみ認められたという。これは当城の段状地形1～3に類似するもので、今回は生活痕跡は認められなかつたが、他の事例と同様に駐屯兵の日常生活の場所として使われた場所と評価できる。

このような中心曲輪が未発達な山城の時期は山神城や四五追城の検討から、16世紀前半～中頃に多いといわれている。木之内城では遺物が出土していないため直接時期を決定することは出来ない。しかし、天正年間の鐵田方の但馬侵攻時の記録に残らないことや、地元から存在を忘れられている点からすると16世紀中頃までに廃城になったと考えるのが妥当であろう。木之内城の時期比定については、今後の主郭の調査をまって結論されることを期待したい。

一方、16世紀前半に限定される遺構として、大桑城（岐阜県山富町）の成果が興味深い。この城は美濃国守護土岐氏が天文年間（1532～1556）頃に本拠として使用したことで知られている。構造は主尾根の曲輪造成よりも、尾根から一段下がった谷斜面に大規模な造成を行うなど、上記の遺構群に共通する点が多い。大桑城は規模が守護クラスの本拠であるので尾根筋を自然地形で残すということはないが、斜面に駐屯の力点を置いている点では木之内城に共通している。今のところ事例が少なく詳細な検討はできないが、これらを総合すると16世紀中頃までの山城遺構は尾根上の曲輪造成に積極的ではなく、駐屯は斜面地を中心に選地することが一般的であったといえるのではないだろうか。

また、16世紀中頃を下る事例で、斜面に段状遺構が検出される事例が近年みつかった。朝日城（兵庫県豊岡市）がそれである。この城は繩張りから天正年間の遺構とされ、尾根上には曲輪（ある施設のための空間ではなく、一定の機能を説くための空間）も配置されている。この遺構の北斜面に段状遺構が數カ所検出され、検出状況から駐屯場所として利用されたことが明らかになった。このことから、これまで中世山城の駐屯場所といえば“曲輪”と考えられてきたが、単なる建物造成に限定した空間“段状遺構”も広く駐屯地として利用されたことが明らかになった。

以上のことから、今後は新たなタイプの山城について事例を追加して検討すると共に、山城遺構周辺の斜面地の調査的重要性が痛感される。また、木之内城は小規模で造成の貧弱な遺構であるが、調査成果は今後の山城研究にとって意義深いものとなった点を強調しておきたい。

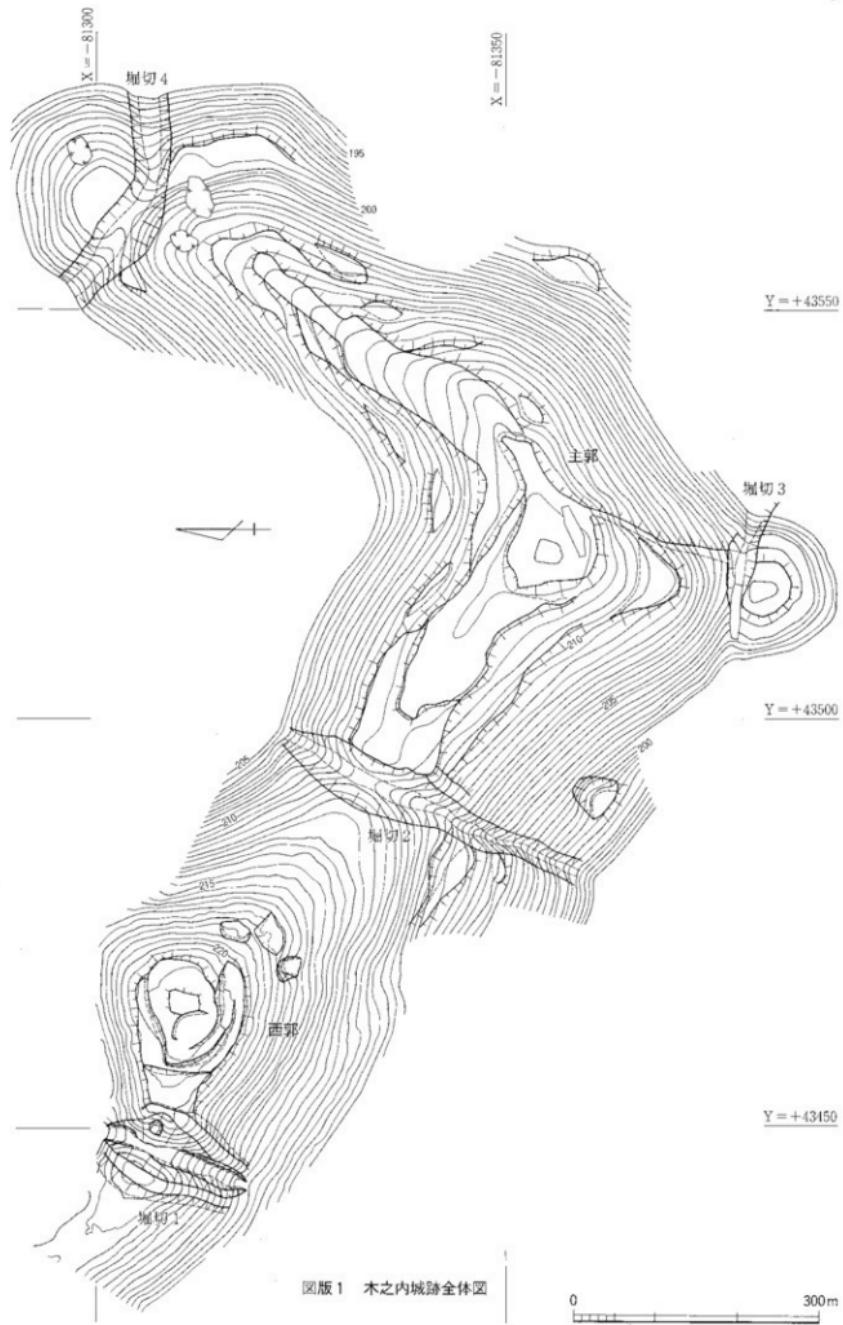
## 註)

- (1) 「近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財調査報告－第2分冊－」三重県教育委員会 1992年刊行
- (2) 「四五追城跡」広島県芦品郡新市町教育委員会 1992年刊行
- (3) 「火山城跡地説明会資料」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1995年刊行
- (4) 「大桑城下町遺跡」岐阜県山富町教育委員会 2001年刊行、ほか山田哲也氏の教示による。
- (5) 「歴史講演会 中郷朝日遺跡を考える 資料」豊岡市出土品文化財管理センター 2001年刊行

# 報 告 書 抄 錄

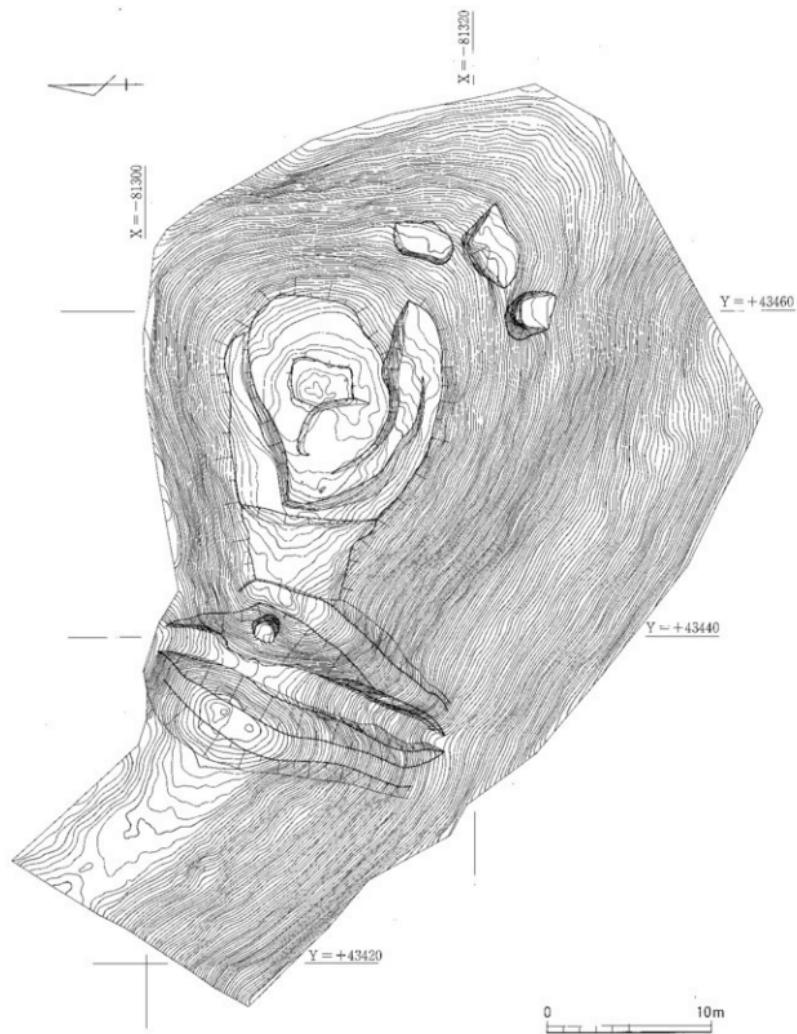
ふりがな	きのうちじょうせき							
書名	木之内城跡							
副書名	播但連絡道路（5期事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	I							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第214冊							
編著者名	山上雅弘・三枝修・小川弦太							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番-5号 電話 078-531-7011							
発行年月日	西暦2001年(平成13年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
木之内城跡	朝来郡朝来町物部	2875	960256 970416 970417	35° 15' 58"	134° 48' 39"	確認調査 全面調査	50m <sup>2</sup> 5 m <sup>2</sup> 1,570m <sup>2</sup>	播但連絡道路 (5期事業)に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物		特記事項		
木之内城跡	城跡	戦国時代	郭・腰曲輪・堀切					

# 図 版

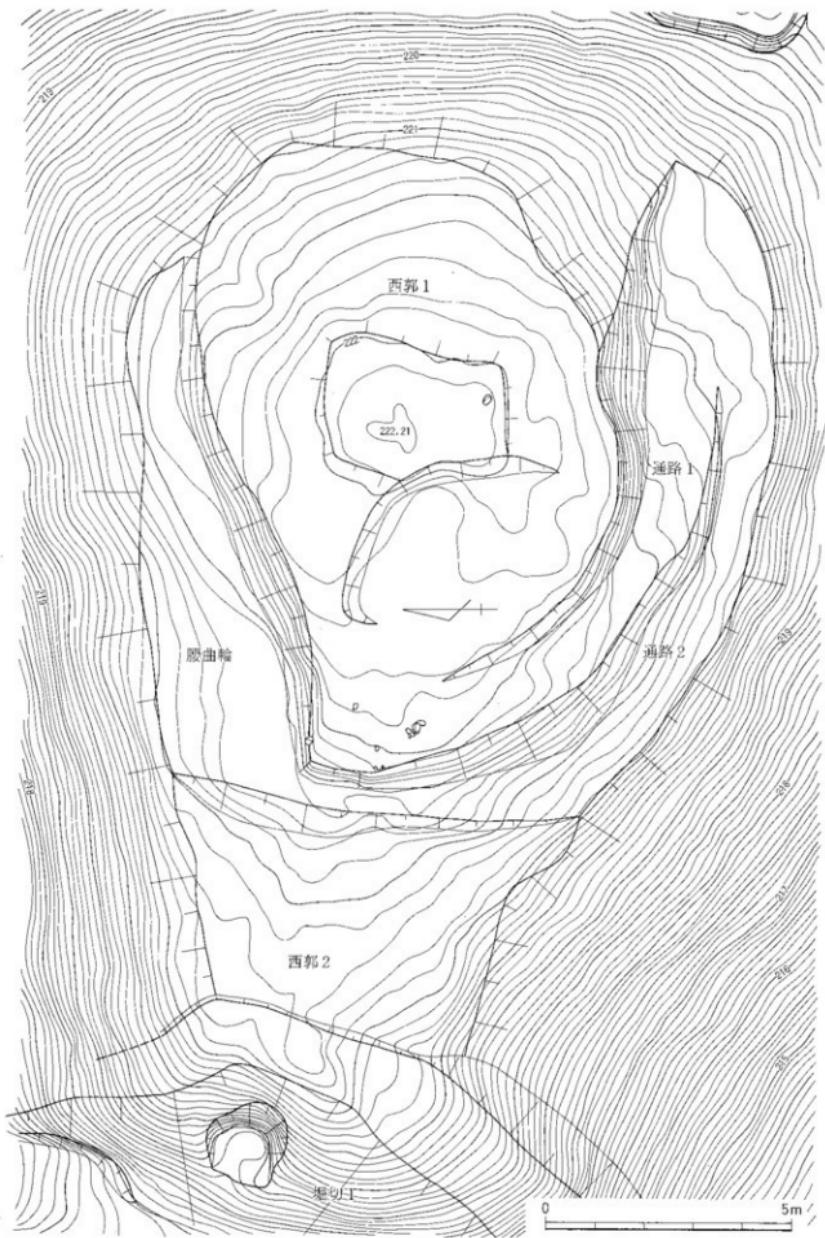


図版 1 木之内城跡全体図

## 図版 2

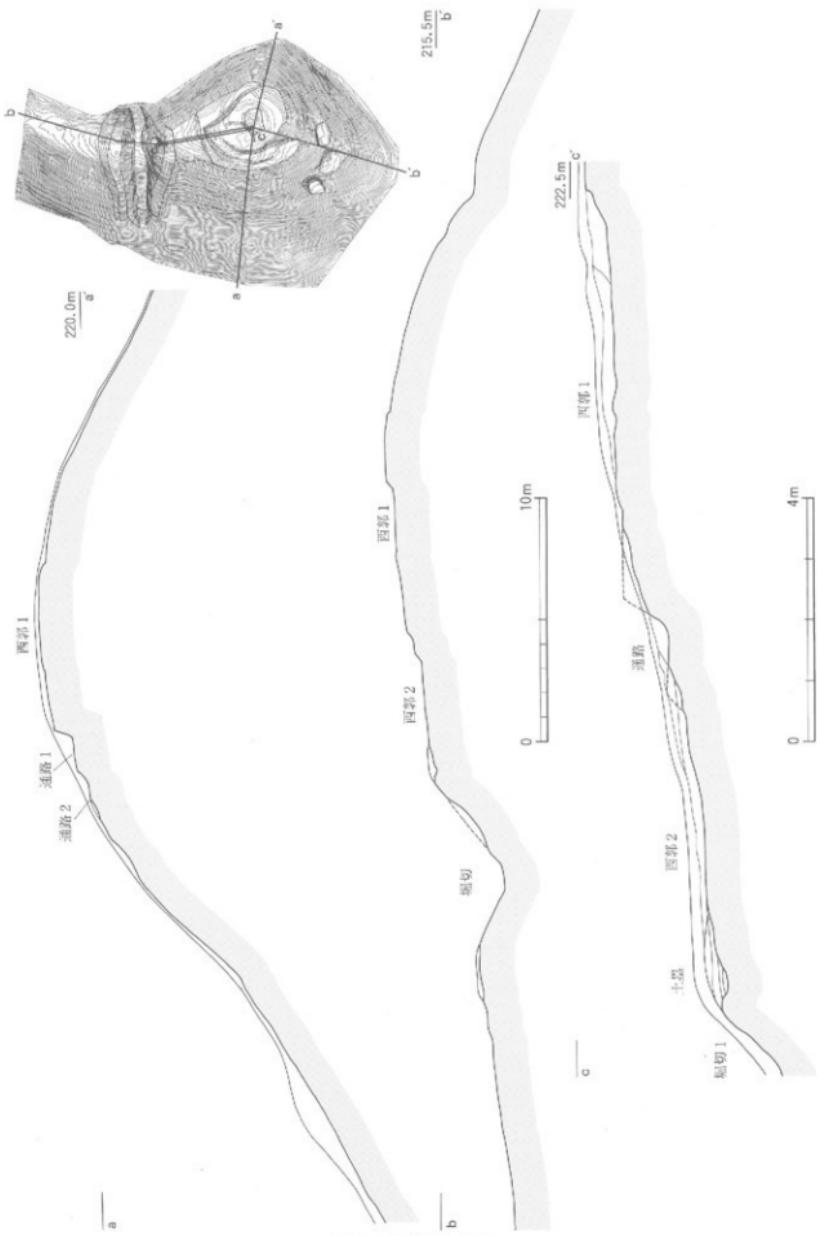


図版 2 調査区全体図 (西郭)

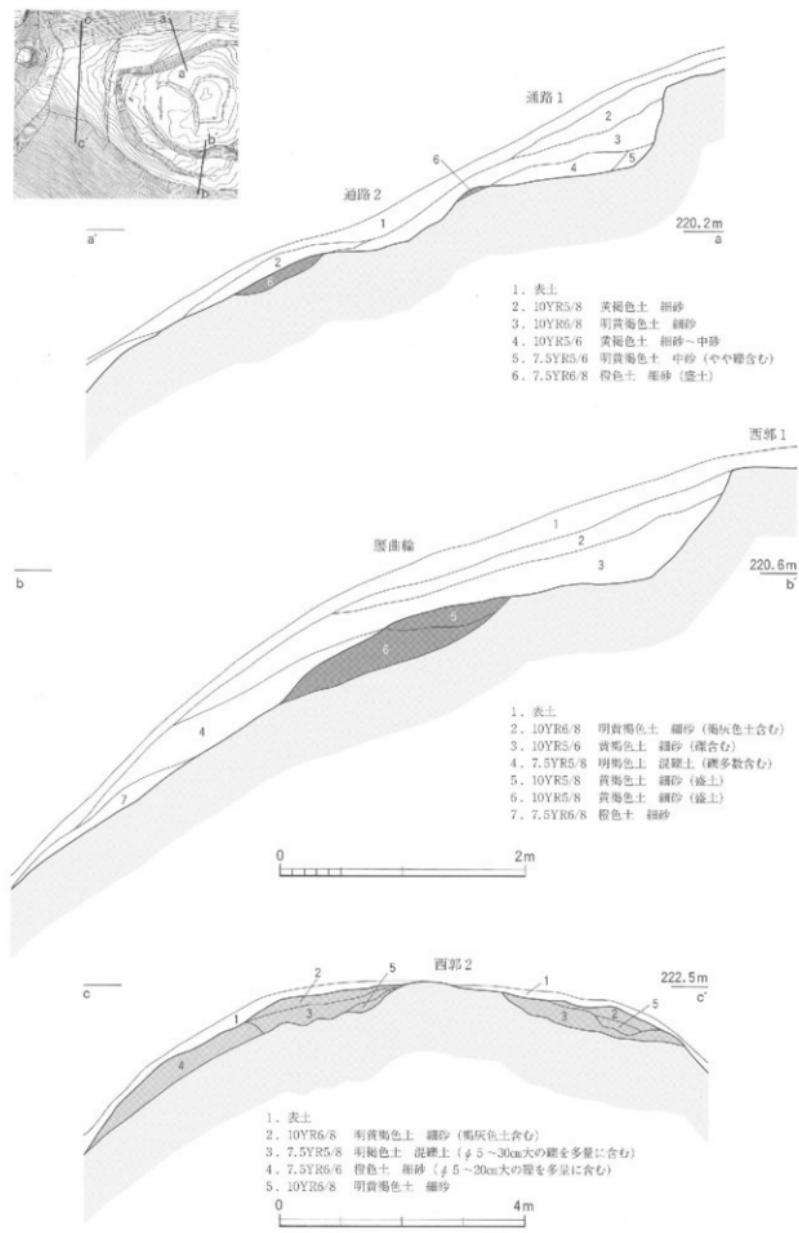


図版 3 西郭 1 平面図

# 図版4

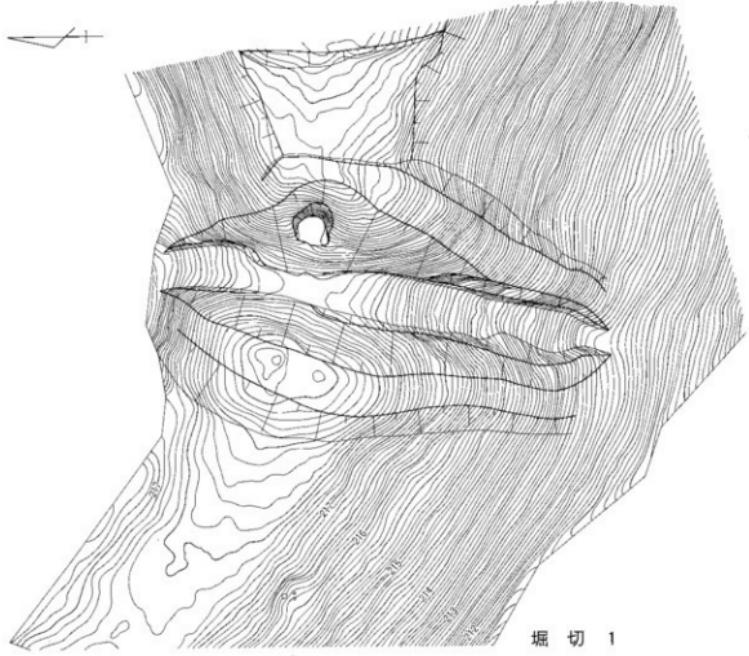


図版4 西郭断面図 1

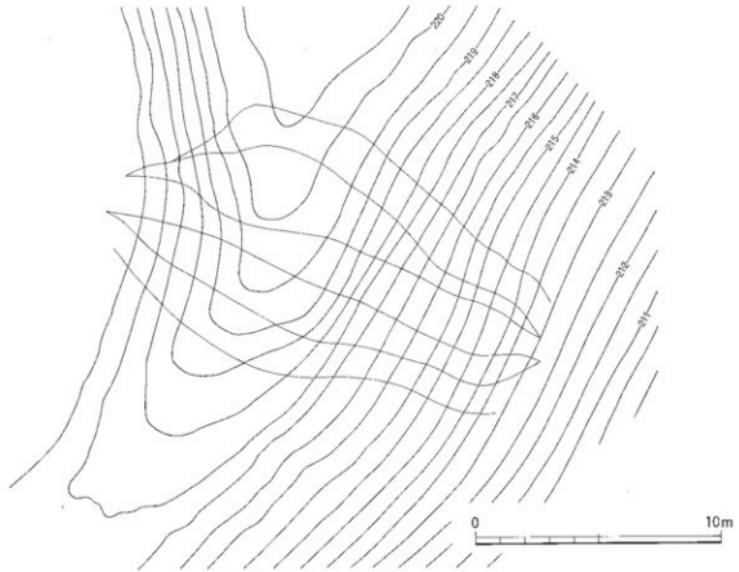


図版 5 西郭断面図 2

図版6

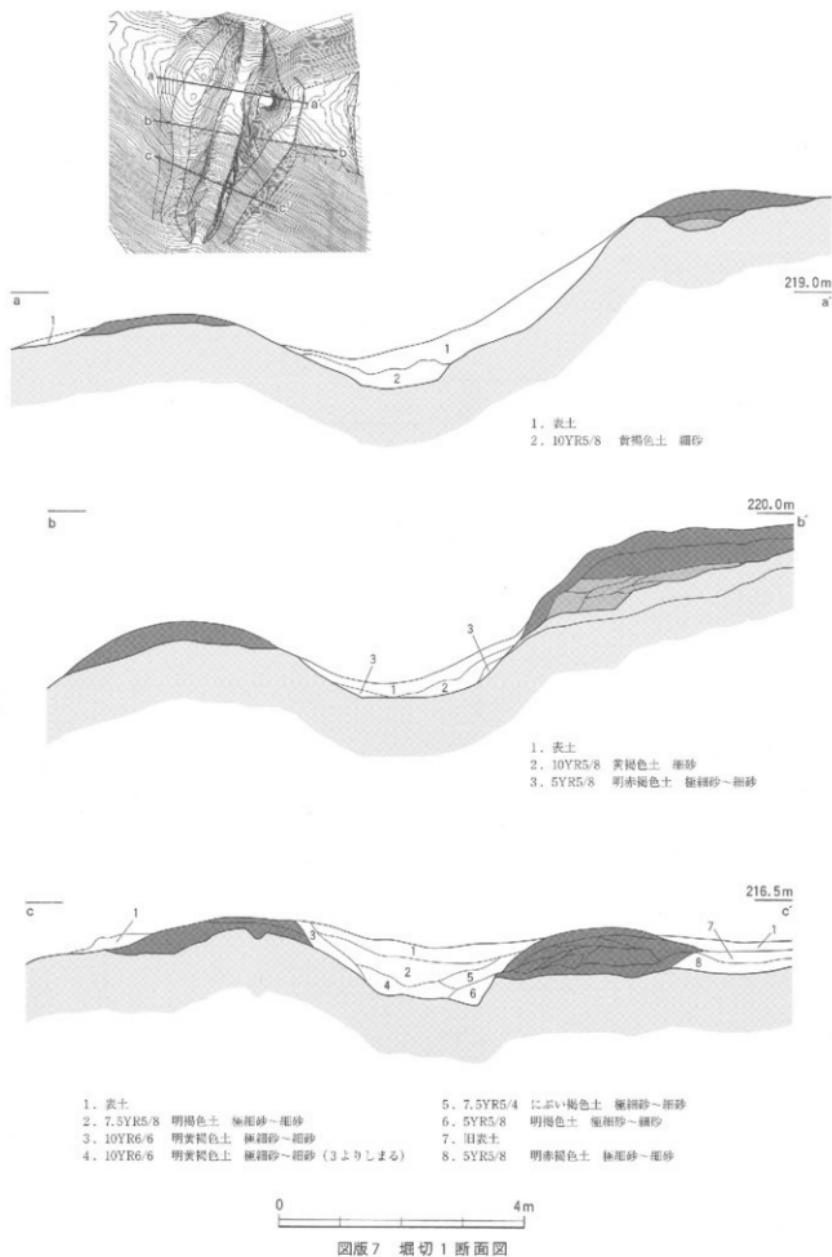


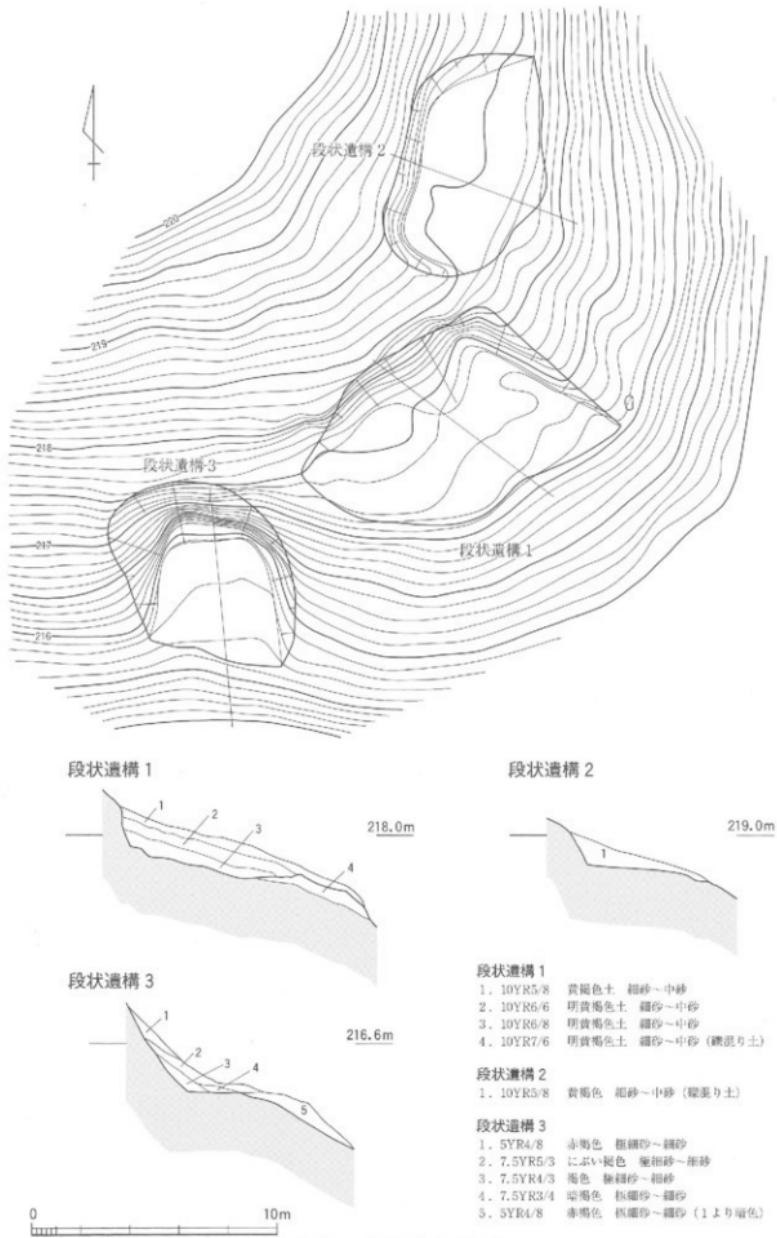
堀切 1



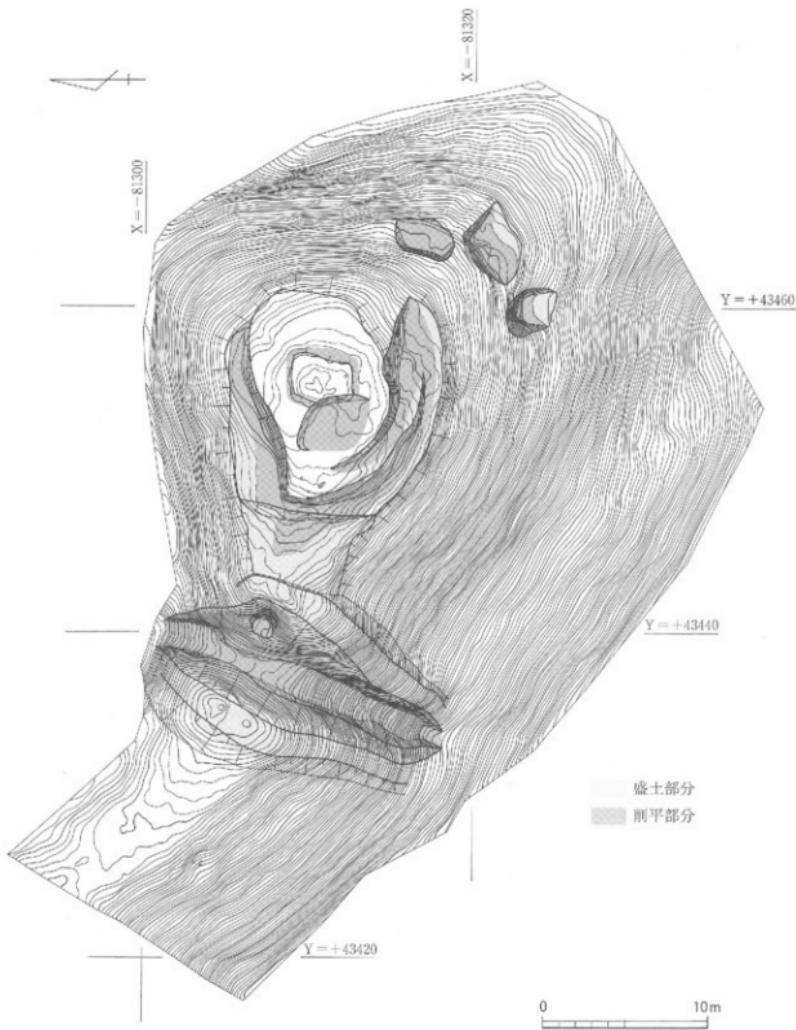
堀切 1 旧地形復元図

図版6 堀切 1 平面図



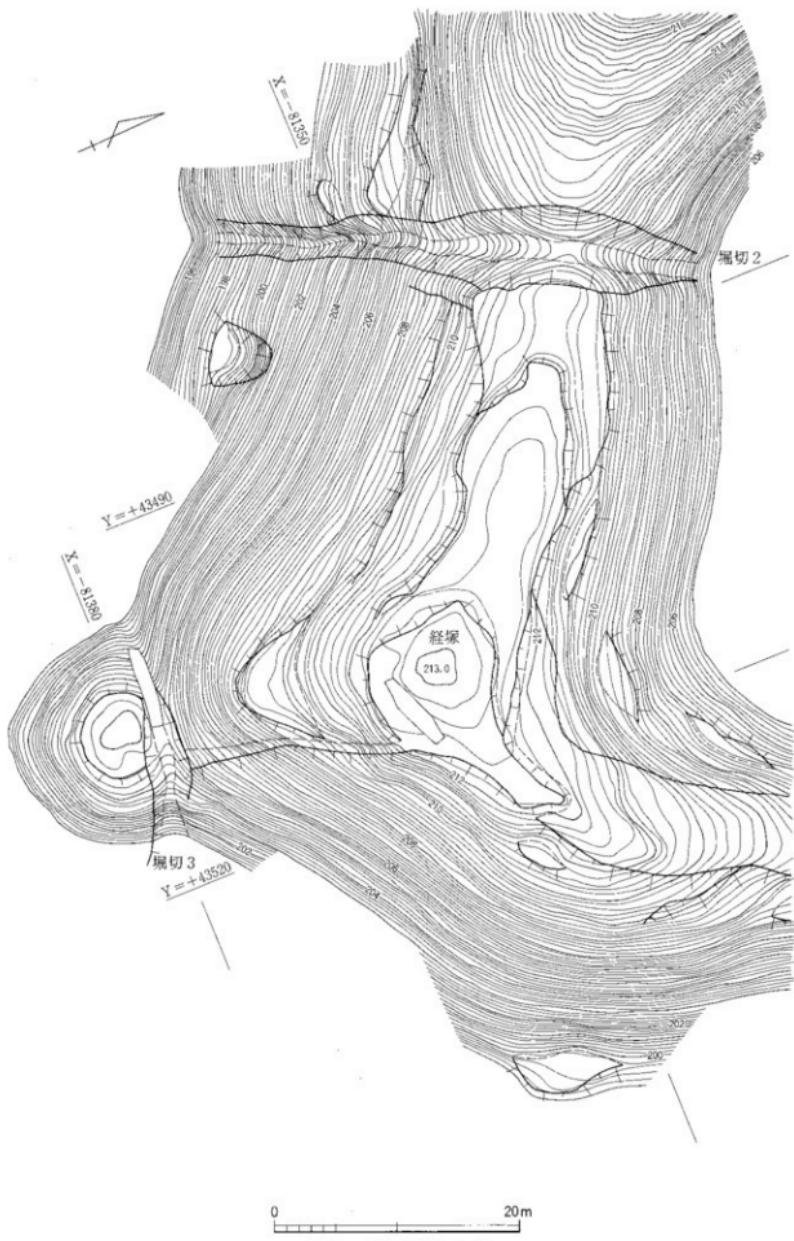


図版 8 段状遺構平・断面図

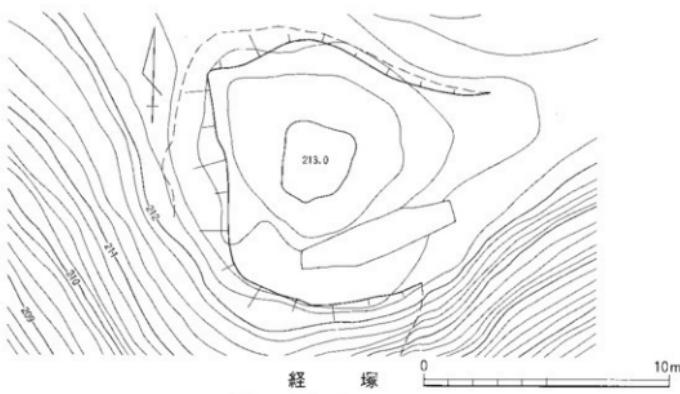
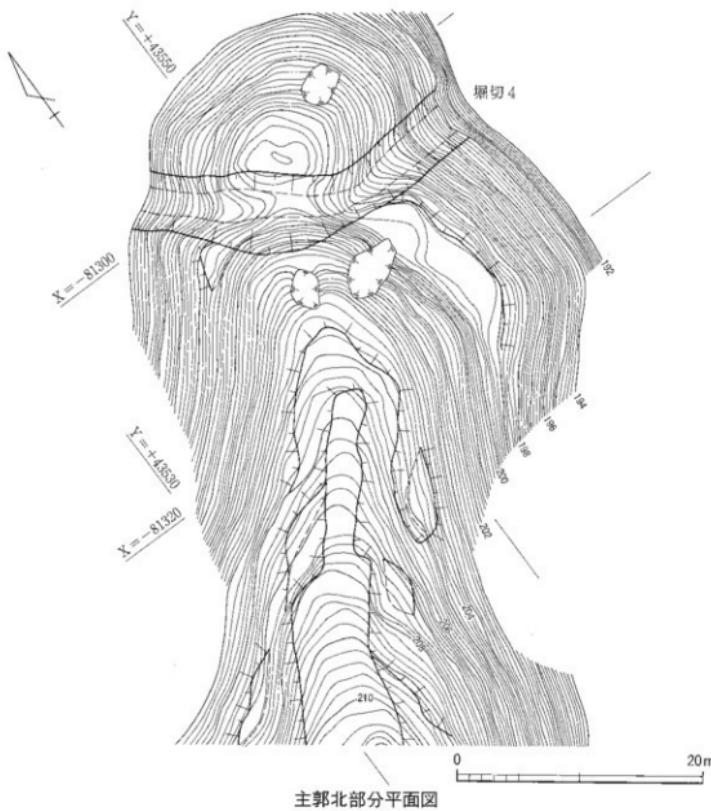


図版9 西郭造成図

# 図版10



図版10 主郭主要部平面図



図版11 主郭北部平面図・経塙

# 写 真 図 版



北西上空から望む城跡（手前山頂が物部城）



北東上空から望む城跡（手前山麓が物部集落）

## 写真図版2



遠景（南東上空から）



遠景（東上空から）



主郭を東山麓から望む

遠 景（西上空から）



青倉谷を城跡方向から望む



物 部 城

(木之内城西郭から)



## 写真図版 4



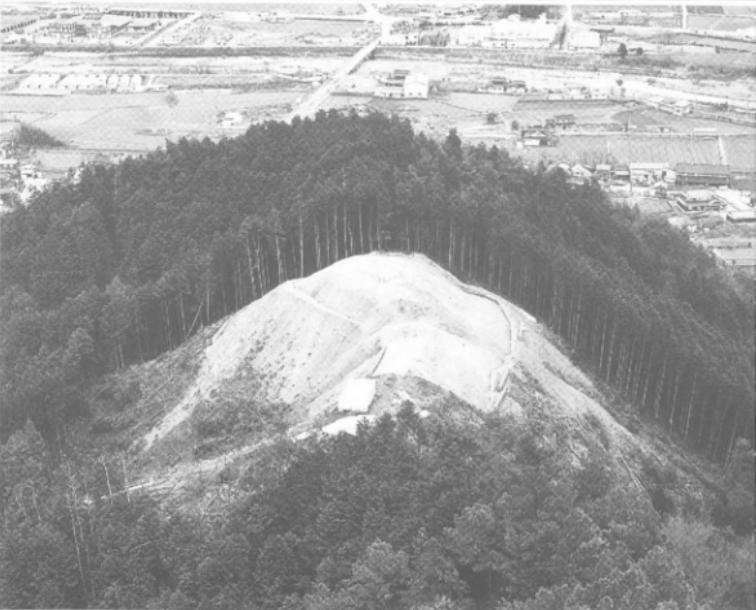
調査前の西郭（南から）



調査前の西郭（西から）



調査後全景（南から）

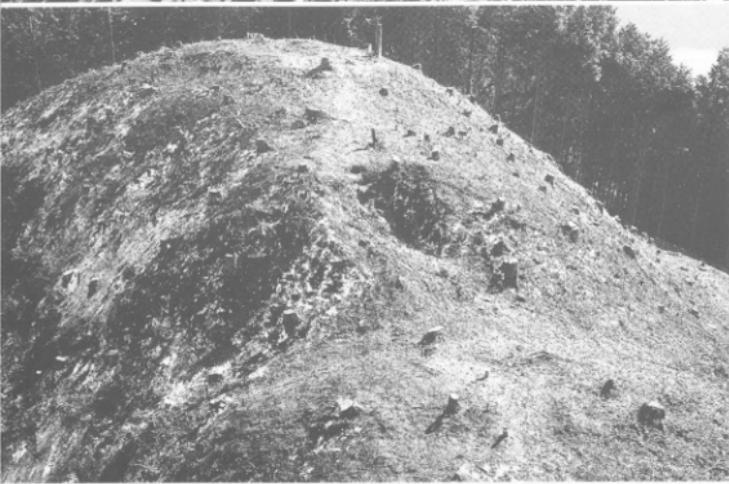


調査後全景（西から）

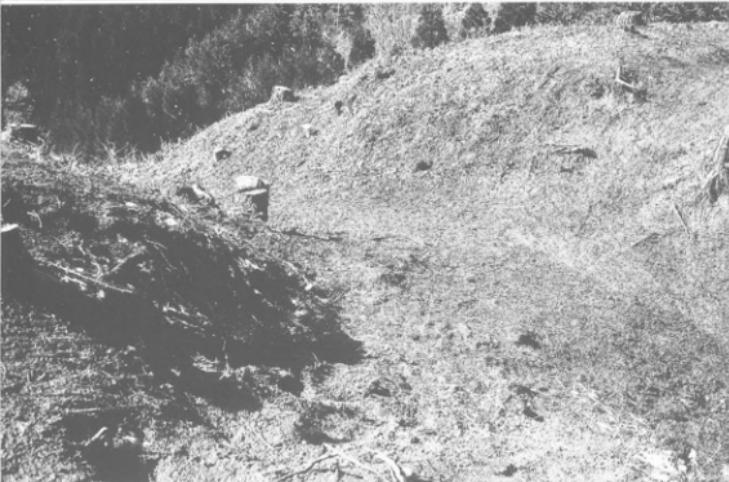
# 写真図版6



調査前の西郭全景  
(北西尾根から)



調査前の西郭中心部 (西から)



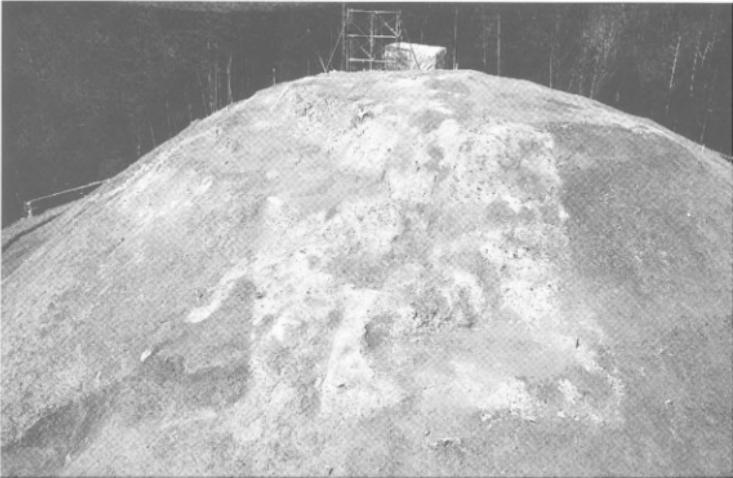
調査前の堀切1 (北から)



調査後の西郭全景  
(北西尾根から)

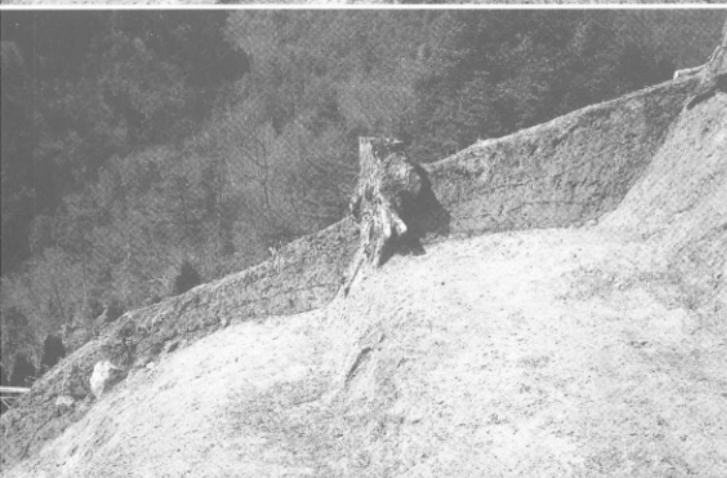


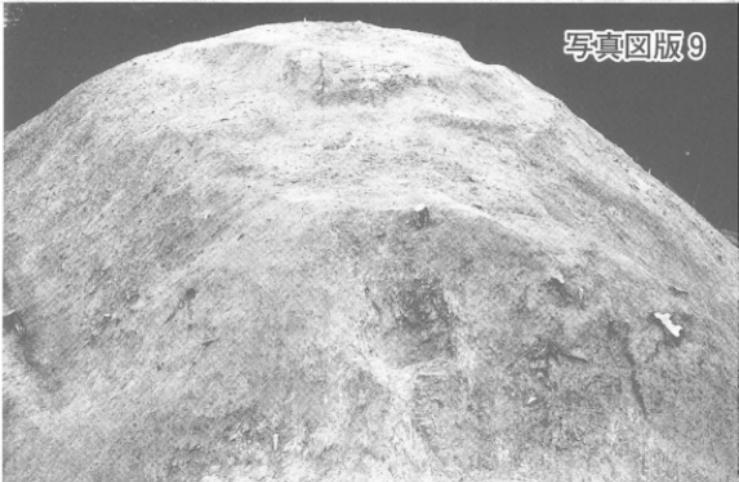
調査後の西郭中心部 (西から)



調査後の堀切 1 (北から)

写真図版8





西郭完掘状況（東から）

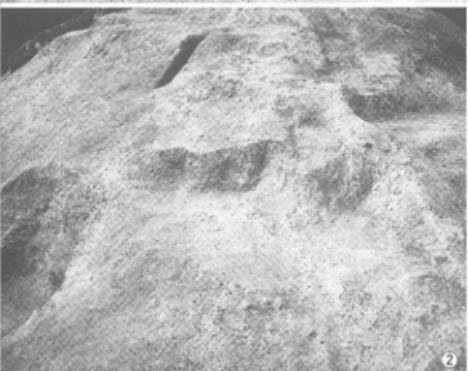


通路・腰曲輪 2 完掘状況  
(東から)



腰曲輪 1 完掘状況（西から）

## 写真図版10



①段状遺構全景（東から）

②段状遺構 1（東から）

③段状遺構 2（北東から）

④段状遺構 3（南西から）

①堀切1 完掘状況

(南から)

②堀切1 (北東から)

③堀切1 断面1 (南から)

④堀切1 断面2 (南から)

⑤堀切1 断面3 (南から)



## 写真図版12



①



②



③



④

①西郭断ち割り状況（西から）

②堀切4断面2の西郭側盛土状況（南から）

③断ち割り状況（南から）

④堀切4断面3の城外側盛土状況（南から）



主郭中央部（経塚付近）周辺  
(西から)



主郭堀切2（北から）



出土遺物

## 写真図版14



西郭2の盛土



物部城跡（木之内城跡から望む）



作業風景

---

---

---

---

---

兵庫県文化財調査報告 第214冊

## 木之内城跡

—播但連絡道路(5期事業)に伴う発掘調査報告書—

平成13年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番-5号  
電話 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号  
電話 078-341-7711

印刷 水山産業株式会社  
〒653-0012 神戸市长田区二番町3丁目4番1号  
電話 078-577-3757

---



この冊子は、再生紙を使用しています。